

『コンコード川とメリマック川の一週間』におけるソローの超絶主義思想の展開*

林 南乃加

1. はじめに

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) の第一作目である『コンコード川とメリマック川の一週間』(*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, 1849) (以下、『一週間』とする) は、1839年の晩夏にソローと兄ジョン・ソロー (John Thoreau) が出かけた二週間の船旅の記録であり、1842年に急逝したジョンに捧げられた哀悼の書である¹。構成面では最初の「コンコード川」(“Concord River”) に続く七つの章に「土曜日」から「金曜日」までの曜日を示す題が付され、全体的に随筆と詩が相互に織り交ぜられる形式を取り、内容面では自然と人間、歴史、宗教、神話などについて、ソロー自身の思索や瞑想が断片的かつ自由な形式で綴られている。

本作はソローの他の主要著作群と比較すると特定の主題を見出しにくく、俎上に載せにくい側面があることは否めない。従来は、主に各章の内容や構成をはじめ、ソローの自然観、友情²、宗教、歴史、神話など様々な側面から考察がなされてきた。近年の例として、リチャード・J・シュナイダー (Richard J. Schneider) は『一週間』における自然と人間の歴史、神話や宗教、先住民や文明の進歩などを論じ、本作には「アメリカ環境保護主義の父」としてのソロー像が見出せると指摘する (*Civilizing Thoreau* 115)。リ

* 本研究は、成城大学特別研究 (研究課題名「超絶主義的観点から見るソローの詩人像—『コンコード川とメリマック川の一週間』に焦点を当てて—」) の助成を受けたものである。

ンク・C・ジョンソン (Linck C. Johnson) は、船旅はソローに「ある種の内的探求」(42) の機会を提供したと記して、旅行記としての意義を検討し、さらに『森の生活』(Walden, 1854) との比較を行っている。シャーマン・ポール (Sherman Paul) は各章の内容を考察し、本作を「『森の生活』の「第一版」」(191) と位置づけ、ソローの「精神的再生の必要性の意識」(212) を具現化するものであると論じている。ウォルター・ハーディング (Walter Harding) は、『一週間』は「ソローの以後の著作群よりも典型的な超絶主義思想を表している」と記しているが (New Thoreau 44), 従来の『一週間』の研究ではソローの超絶主義思想に焦点を当てた具体的な考察はあまり見当たらない。

そこで本稿では、後年の『森の生活』を始めとする主要著作群に顕著に表れるソローの超絶主義思想の萌芽的段階を『一週間』において見出せるのではないかという仮説のもとに、本作の根幹的部分となるソローの超絶主義思想の要素に光を当てたい。1845年7月からウォールデン湖畔において2年2カ月の独居生活を営んでいた期間に執筆されたことを考慮すると、本作は湖畔滞在中の当時のソローの超絶主義思想の傾向、および後の著作群に通じる思想上の特徴を備えていることは十分に想定される³。このような観点から本稿では、『一週間』におけるソローの初期の超絶主義思想の様相とその展開を探る。

2. ソローの自己信頼の思想

超絶主義思想家の詩人チャニングの静かな川旅を歌う一節から始まる章「日曜日」は『一週間』の中でも最も長く、時間や生活の営み、自然、先住民の話題から、やがて神話、教会、信仰、キリスト、聖書に関する話題へと転換され、ソローの宗教的思索が示されている。「日曜日」はソローがコンコード川の穏やかな光景を比喩的に表現する「自然の安息日」(46) と換言できるほど、全章の中でも特にソローの超絶主義思想を裏付ける自然賛美の傾向を色濃く持つ章である。

1837年にエマソンの『自然論』(Nature, 1836) の初版を入手したソローは“the Hedge Club”に加入し超絶主義者となっていた (Harding, Days 60, 63)。1841年1月29日の日記においてソローは、「良心への服従と神への信頼は、

極端に、そして熱心になって厳粛に説かれることが多いものだが、自己の内面に引き籠り、自分の力を信頼することに他ならない) (“There is something proudly thrilling in the thought, that this obedience to conscience and trust in God, which is so solemnly preached in extremities and arduous circumstances, is only to retreat to one’s self, and rely on our own strength.”) (*Journal* 1, 235) と記し、教会で熱心に説教されることではなく自己の内面を通して神を信頼すべきであるという自己信頼的な考え方を示している。翌年 1842 年 1 月 1 日の日記においてもソローは、教会は救済の場ではないという趣旨のことを述べて教会への批判的な姿勢を露わにしている (*Journal* 1, 355)⁴。ユニテリアン派と超絶主義思想の特徴を綿密に論じているディーン・グロジンス (Dean Grodzins) によると、「超絶主義思想家たちは、神は絶えず自然と人間精神に靈感を与えていると信じており、また、全ての人間の靈感は、聖書との関連の有無に関わらず、生来のもので、神に由来すると信じていた」(55)。ソローが教会よりも自己の内面に向き合う姿勢には、人間の精神に神と通じる性質が宿ることを前提とする超絶主義思想家としての特徴が見出せる。このようなソローの教会批判と自己信頼の考え方は「日曜日」へと繋がっており、「日曜日」執筆時のソローはすでに自身を超絶主義思想家としてみなす考え方をより堅固にしていたと考えられる。

「日曜日」においてソローは自らの信仰について語る際、文明化された国々で崇拜される神は神聖なものではなく、人間の権威と体面の結合にすぎないと指摘している (“It seems to me that the god that is commonly worshipped in civilized countries is not at all divine, though he bears a divine name, but is the overwhelming authority and respectability of mankind combined.”) (65)。また、ソローは神と人間との関係性を直接的に捉え、人間は内面を通して神との関係を構築すべきであるとし、間接的で慣習化した形での信仰に疑問を呈している (“What man believes, God believes.... I have never yet heard or witnessed any direct and conscious blasphemy or irreverence; but of indirect and habitual enough.”) (66)⁵。このような考え方は「日曜日」においてソローが「私はあなたによって造られた者で／あなたの性質を持つ子である。」 (“Though I am your creature, / And child of your nature,”) とし、「誓って宣言するが／私は神の奴隷ではない。／もしあなたが率直に振る舞うのなら／私は大いに努力するだろう／もしあなたが偉大なる計画を／愛する者に明かすのなら

ば／ここよりも広い領域を／彼に与えたまえ。」(“And I swear by the rood, / I’ll be slave to no God. / If ye will deal plainly, / I will strive mainly, / If ye will discover, / Great plans to your lover, / And give him a sphere / Somewhat larger than here.”)と歌い(69)⁶、神からの独立と自由、神から与えられた使命を生きる一人の人間としての自己像を思い描く詩においても窺える。ここで「あなたの性質」とは人間の「内なる精神」(“genius”)や、肉体よりも「より高次の性質」(“higher nature”)を意味する精神(Walden 216, 219)、すなわち自己信頼の思想の根拠となる要素を指していると考えられる⁷。このような考え方はまた、「日曜日」において、“Live your life, do your work, then take your hat.”(75)という一文にも表れており、それはエマソンが「自己信頼」(“Self-Reliance,” 1841)において「普遍的な精神」(“genius”) (CW 2: 45)の重要性を説きながら、“Do your work, and you shall reinforce yourself.” (CW 2: 54)と述べるレトリックを髣髴させる。

さらに「日曜日」においてソローがイエス・キリストや聖書について思索を重ねている点は、自己信頼の考え方を裏付けるものである。ソローはイエスを「この世の舞台の崇高な役者」とし、宗教的な意味で崇高な存在であることを認めているが、他方、イエスの思想については「全て別世界に向けて語られる」ものであり、精神と物質との間で生活しなければならない現世の人間の様々な現実的諸問題に対応していないことを問題視する(“There are various tough problems yet to solve, and we must make shift to live, betwixt spirit and matter, such a human life as we can.”) (73-74)。聖書についてもソローは幼少時から教会や日曜学校などで手に取って慣れ親しんでいたものの、それを「一種の空中楼阁」(71)であるとし、イエスと同様、聖書を人間の現実生活に根差していないものとして批判的な見解を示している⁸。このような点からソローは、イエスや聖書の教えをそのまま現実生活において実践するのは困難であると考え、自身の内面においてこそ真の信仰の対象を見出していたことがわかる。それがつまり、自己信頼ということであった。

3. 「より高次の法則」と“genius”に対するソローの認識

3.1. 「より高次の法則」の表象

自己信頼の考え方が示される「日曜日」に続く「月曜日」において、ソローは舟旅を記録しながら、超絶主義思想の中心的な要素である「より高次の法則」(“higher laws”) (Emerson, *CW* 1, 34) という考え方を度々想起させている。ロバート・D・リチャードソン・Jr. (Robert D. Richardson, Jr.) は、ソローが『一週間』で探究したことは、ソロー自身の性質を導く法則と自然の法則との類似の度合いであり (157)、本作の執筆中にソローを導いた法則はウォールデン湖畔における生活や記述へとソローを導いたものであると指摘している (159)。『一週間』においては特に「月曜日」において「より高次の法則」の考え方が展開されており、それは『森の生活』におけるソローの超絶主義思想が顕著に表れた章「より高次の法則」(“Higher Laws”) に見られる考え方に繋がるものである⁹。

「より高次の法則」へのソローの考え方は、本作の序盤においてソローがコンコードの自然を神聖化し、そこに普遍的な法則を重ねて見る点に既に見受けられる。冒頭の章「コンコード川」(“Concord River”) において、ソローは文明化以前のコンコード川の過去、現在、未来の様相に想いを馳せ、コンコード川の様相を「時の外側にあり、永遠で、若々しく、神聖である」(8) と述べ、それを「宇宙、時間、この世の全てと同じ法に従う、あらゆる移ろいゆくものの象徴」(“an emblem of all progress, following the same law with the system, with time, and all that is made”) (12) であるとし、この土地に対する特別な愛着を示している。「土曜日」においてもコンコード川の旅の記述が続くが、ソローはやや唐突な形で、「いかなる専制君主の法よりも不変の自然法が優越する」こと (“Nature’s laws are more immutable than any despot’s....”) (35) に言及している。つまり、『一週間』の最初の二つの章「コンコード川」、 「土曜日」には、ソローが自然の中で神聖な要素としての「より高次の法則」を見出そうとする思想が直接的かつ顕著な形で表れているといえる。

「より高次の法則」の概念を想起させるソローの記述は、「月曜日」においてより具体的かつ明確に見受けられる。メリマック川の舟旅で訪れた場所に纏わるアメリカ先住民の戦闘の歴史、人間生活や古典、新約聖書など

についての記述が続く中で、ソローは神が人間を据えた場所に「神の法」(“his law”)が届くと信じ、「諸国の便宜は衝突し合うが、決定的に正しいことのみが万人にとって便宜的である」と主張する(“Let us see if we cannot stay here where He has put us, on his own conditions. Does not his law reach as far as his light? The expedients of the nations clash with one another, only the absolutely right is expedient for all.”) (134)。ソローはそこでソフォクレスの『アンティゴネー』(“the Antigone of Sophocles”)を参照し、女主人公アンティゴネーがクレオン王(“king Creon”)の命令に背いて兄ポリュネイケース(“Polynices”)の埋葬を主張する場面を長く引用している(134)。アンティゴネーが人間の定めた法よりも神々の慣習を上位と見なし、「書き記されてはいなくても揺るぎない神さま方がお定めのだ掟」(“the unwritten and immovable laws of the gods”) (135)と表現する箇所は、当時の超絶主義思想家が中核に掲げる「より高次の法則」に通じる最古の考え方の一例である¹⁰。ここでソローが「より高次の法則」の考え方の起源の一つを提示するのは、人間の長い歴史において「より高次の法則」を根拠づけ、その不朽の正当性を印象づけるためであると考えられる。

また、ソローが音や旋律といったものに「より高次の法則」を連想し、音楽と高潔な人間との間に密接な関連性を見出している点も注目に値する。ソローは音楽を「普遍的な法則の響きが広く知らされる音」(“the sound of the universal laws promulgated”), 「運命の高貴さへの信頼をはるかに凌ぐような旋律」(“such strains as far surpass any man’s faith in the loftiness of his destiny”)と定義づけ、「強い歩調で歩むのは高潔な人の脈拍が自然の鼓動と調和を保っているときで、彼は宇宙の旋律に合わせて歩む」(“Marching is when the pulse of the hero beats in unison with the pulse of Nature, and he steps to the measure of the universe....”)と述べる(175-76)。続く「風鳴琴の囁き」(“Rumors from an Aeolian Harp”)と題された短い詩においては、風鳴琴の旋律に耳を澄ませる「高潔な人間」像が示唆されている(176)。風鳴琴は風の振動で音を奏でる電信であるため、ソローは他の楽器にもまして、この「屋外の楽器」に音楽的な価値を認めていた(Foerster 82)。ソローがこの風鳴琴に似た微かな音楽を聴いた時の感覚を「人間ではなく神々によって送られる、国中に伝言を行き渡らせる電信の豎琴」(“the telegraph harp singing its message through the country, its message sent not by men but

by gods”）(177)と表現する一節は、『森の生活』の「より高次の法則」の章において、ソローが豎琴の音色を「宇宙保険会社から派遣されて宇宙の法則を宣伝しながら飛び回る外交員」(“The harp is the travelling patterer for the Universe’s Insurance Company, recommending its laws....”) (218)と表現する一節に繋がっている。

このように見ていくと、普遍のかつ神聖な法、すなわち「より高次の法則」を重視し、その法則と調和を図って生きる人間を高次の存在と考えるソローの立場は『一週間』においてすでに確立されていることがわかる。「より高次の法則」に則した人生を生きることの重要性を認識した実践主義的なソローの人間観は、超絶主義思想家としての初期段階から示されていると言える。

3.2. 人間の“genius”についての思索

「より高次の法則」に対する認識を深めながら、『一週間』の中盤から後半にかけてソローは、「より高次の法則」に照応する人間生来の“genius”について、自身の思索を随所で綴っている。この“genius”はエマソンの重視する「普遍的な精神」、また「大霊」(“The Over-Soul,” 1841)において示される人間の敬虔な特性であり(CW 2: 288)、ソローにおいては先述のように「内なる精神」や「より高次の性質」を持つ神聖な精神を指している。

「火曜日」においてソローは高貴で詩的な職業に思いを巡らせ、野外の仕事に従事するのを“our Good Genius”(209)が許すことは幸せだと述べ、人間の内面に備わる天分について言及している。続く「水曜日」においてもソローは自身の友情論を繰り広げる中で、“our Good Geniuses”(279)が許す限り友人同士の交際ができれば喜ばしいことだと述べている。『一週間』の執筆段階から、ソローは人間の“genius”への問題意識を持っていたことがわかる。

このようにソローは“genius”という霊性を備えた人間像を提示しながら、「水曜日」においては人間が本来持つこの神聖さを呼び覚ます方法について言及している。「内なる朝」(“The Inward Morning”)と題する詩においてソローは、人間の内奥の部分に目を向け、「外側の自然が身に着ける／あらゆる衣服が私の心にしまわれていて／流行は刻々と変わりゆくけれど／自然が全てを回復する」(“Packed in my mind lie all the clothes / Which outward

nature wears, / And in its fashion's hourly change / It all things else repairs.”)と綴り、「私の内奥の精神」(“my inmost mind”)が「平穏な新しい光」に照らし出され、さらに「私の内奥の魂」(“my inmost soul”)が「陽気な朝の便り」を聞いたことを朝の新鮮さを強調する空や鳥や風のイメージに託して歌っている(294-95)。ここで「精神」や「魂」は“genius”を想定していると考えられ、人間の「内なる精神」が一日の始まりと共に目覚める様子が想起される。ソローは外界の自然と内面の調和を維持することを重視し、人間の「内なる朝」が全てを回復する力を持つと信じている。これは後に『森の生活』の「住んだ場所とその目的」(“Where I Lived, and What I Lived For”)の章においてソローが朝の神聖さを説き、「内なる精神」に目覚めた「より高次の生活」(“a higher life”)(89)を強調する言説に通じる「いっそう内面化された象徴の夜明けを予想させるもの」(伊藤 76)であり、ソローが精神の内奥に向き合う姿勢を示すものである。

「水曜日」に続く「木曜日」においては、ソローは「天性の人とは、人間の場合、創造する人であり、靈感あるいは霊力の備わった、未発見の法則に従って完璧な仕事をする人物である」(“The Man of Genius, referred to mankind, is an originator, an inspired or demonic man, who produces a perfect work in obedience to laws yet unexplored.”)(328)と記している。ここで「天性の人」とは“genius”の働きに非常に鋭敏で、「未発見の法則」、すなわち「より高次の法則」と同義である「より高次の原理原則」(“higher principles”)や「宇宙の法則」(“the laws of the universe”)(*Walden* 216, 218-19)との調和が取れた生活を送る人間を指していると考えられる。このように“genius”を重視するソローの人間観は、『森の生活』の「より高次の法則」の章においてソローが“genius”の重要性を強調し、「より高次の法則」に則して生きる人間像を提示している点に繋がっている。ソローの後の主要著作群においては、このような“genius”を尊重した生活を送る人間像が描かれることになるが、上記の一節にはそうした方向性が明示されているといえよう。

4. 詩人についてのソローの瞑想

4.1. 表現者としての詩人

前章で見たように、「木曜日」の終盤において“genius”と「より高次の

法則」との密接な関係性が浮上するが、最終章となる「金曜日」においては、ソローは“genius”を詩人論の根拠とし、詩人について集中的に議論を深めている。

ソローは前半の章「日曜日」において、「書き記される最も崇高な英知」とは「韻文で」語られる、あるいは「音楽的な旋律を持っている方法で」語られるものであると主張し(91)、他方、詩を最も高尚な芸術形式とみなし、“the genius of humanity”と“the gods themselves”に由来するものであると定義づけている(95)。ソローはそのような考え方を「木曜日」においても引継ぎ、「最も神聖な詩」とは「最も厳しい諷刺詩」であり、「その内なる精神が優れているほどその諷刺詩の刃は鋭くなる」と述べている(309)。ソローによれば、詩は神が人間に賦与した“genius”に基づくべきであり、その“genius”の働きが先鋭であればあるほど詩の崇高さが増すというのである。

またソローが、詩人の「優れた力強さと忍耐力によって、弱った仲間たちは彼の中に神を見るだろう」(“... by his greater strength and endurance his fainting companions will recognize the God in him.”)(340)と述べる点には、ソローが思い描く詩人の仕事の本質には神の存在に通じるものがあることがわかる。このような側面においてソローは“genius”を神と対応する本質的な要素と見なし、超絶主義的な詩人像を思い描くことへと昇華させていると言える。ソローの詩人像が超絶主義思想的な意味における神の概念に基づくことは、「神が人間に多くの偉大な才能を与えたというとき、それはしばしば、その人が天を自分の両手の届く範囲に引き寄せたことを意味する」(“To say that God has given a man many and great talents, frequently means, that he has brought his heavens down within reach of his hands.”)(342)とソローが記している点に裏付けられる。

『一週間』においてソローが、ジョンに捧げた哀悼の詩をはじめ、数々の詩作を重ねていたことを考慮すると、その背景には上述のようなソローの詩人観があったことが推察される¹¹。本作には、コンコードの歴史や旅の途中でソローが見た自然の風景、ギリシア神話、友情や愛情、人間観を表す詩が随所に見られ、ソローの詩の創作意欲が窺える。ソローの詩を分析しているヘンリー・W・ウェルズ(Henry W. Wells)は、一般的には、「ソローの詩は未熟で詩的な洗練さが不十分であるとの批判があった」(131)と

指摘した上で、「ソローの詩が過去や未来、山の彼方の世界へと向けられるのは肉体の目ではなく魂の目で見ているためである」と論じている(133)。ウェルズの言うようにソローの詩は精神的なものを追求するために書かれていると言えるが、ソローの詩作は超絶主義思想が掲げる神の概念に支えられていることを念頭に置かねばならないだろう。ソローの詩人観は、“genius”に基づき、前章で言及した「より高次の原理原則」や「宇宙の法則」に則って生きる超絶主義的人間観を基盤として詩作するソロー自身の姿を想定したものであるといえよう。

上述のようにソローは、“genius”に基づく詩人の理想的な姿を、またその存在が他者に与え得る影響力とその使命を真摯に捉えている。これはエマソンが「詩人論」(“The Poet,” 1844)において“genius realizes and adds”(CW 3: 11)と述べ、“genius”や“the soul of the poet”を重視し(CW 3: 22-23)、“the divine aura”(CW 3: 26, 斜体は原文による)に従うことで詩や歌を生み出すことを説く考え方に対応するものである。ただし本節で取り上げたソローの考える「詩人」は、一般的な意味でいう詩人、つまり詩を書く詩人のことを指していると考えられる。ソローの叙述の仕方はやや曖昧であるが、超絶主義思想的な観点で韻文を書く詩人のことを指しており、先回りして説明しておくならば、次節において述べるように、生活者としての詩人とは必ずしも一致しないものと考えられる。

4.2. 生活者としての詩人

上述のように「金曜日」においてソローは表現者としての詩人像について説明しているが、ここではさらにその延長線上に、詩人について独自の観点から思索を深める様相が見て取れる点に着目したい。

ソローは、「詩人が普通の人々の午後を彩ることのない靈氣に最も感化され鼓舞されているとき、彼に才能はなく、もはや詩人ではない」(“When the poet is most inspired, is stimulated by an *aura* which never even colors the afternoons of common men, then his talent is all gone, and he is no longer a poet. The gods do not grant him any skill more than another.”)と謎めいた言い方をし、そうした詩人は「最も才能のない者」であり、「散文の作家のほうが巧みである」と述べる(342 斜体は原文による)。ここには、韻文作家としての詩人は他人の行動に影響力を持つような「靈氣」に包まれない限り、

詩人として無能であるという考え方が示されている。そして、「詩人が自分の詩句を発する息は、彼の生きている息でなければならない」(“The breath with which the poet utters his verse must be that by which he lives.”) (342) と述べ、独自の詩人論を以下のように展開する。

Great prose, of equal elevation, commands our respect more than great verse, since it implies a more permanent and level height, a life more pervaded with the grandeur of the thought. The poet often only makes an irruption, like a Parthian, and is off again, shooting while he retreats; but the prose writer has conquered like a Roman, and settled colonies. (342)

上記の一節においてソローは、韻文と同等の気高さを備えた優れた散文は、より永続的で一定のレベルの高さを、すなわち思考の高潔さがより浸透した生活を暗示するため、優れた韻文以上に尊敬に値すると述べる。詩人は、侵入しても退却しながら矢を射るパルティア人に、散文の著者は、土地を征服し植民地を建設するローマ人に喩えられている。韻文と散文とのこのような対照性を明確にする比喩表現において、ソローは韻文作家であることに不安を抱き、散文作家であることにはより自由に、作家としての自身の本領を発揮できるものを感じ取っていたのだと考えられる。しかし、散文の魅力を強調することが、ソローが最終的に言いたいことではなかった。韻文よりも散文に価値を置くという価値観の転換はやがて、ものを書くことよりも「生活する」ことそのものを重視する立場にソローを誘導していたと考えることができる。ソローが、以下の一節において「真の詩」について考察している点に着目したい。

The true poem is not that which the public read. There is always a poem not printed on paper, coincident with the production of this, stereotyped in the poet's life. It is *what he has become through his work*. Not how is the idea expressed in stone, or on canvas or paper, is the question, but how far it has obtained form and expression in the life of the artist. His true work will not stand in any prince's gallery. (343 斜体は原文による)

ソローによると、「真の詩」とは紙の上で印刷されて読まれるものではなく、その詩人の生活の中で生み出されるものであり、その仕事をとおして見えてくる彼そのものなのである。ある特定の概念が石やキャンバス、紙の上で表現されることではなく、その芸術家の生活の中で形成され、また表現されることが問題であり、それは美術館の芸術作品とは対照をなすものである。このようなソローの考え方は、詩的精神と感性を、紙の上ではなく人生を生きるという領域において活かそうとする意志の表れであると言える。ソローが、「僕の人生は文字にして書き表せば詩であるといってもいいものであったが、しかし生きることと人生を書き表すことの両方はできなかった。」(“My life has been the poem I would have writ, / But I could not both live and utter it.”) (343) と述べるとき、自分の人生を詩と同義とみなす一方、自己の現実の人生を生きること比重を置く経験主義的な側面が見られる。ソローは詩の技巧を凝らし表現力を高め、詩を創作して世に問うよりはむしろ、それに相当する価値を自らの人生において深く生きること求めたのではないだろうか。

このようなソローの姿勢は、上述の引用文の直後に続く以下の詩においても窺える。

THE POET'S DELAY.

In vain I see the morning rise,
In vain observe the western blaze,
Who idly look to other skies,
Expecting life by other ways.

Amidst such boundless wealth without,
I only still am poor within,
The birds have sung their summer out,
But still my spring does not begin.

Shall I then wait the autumn wind,
Compelled to seek a milder day,
And leave no curious nest behind,

No woods still echoing to my lay? (343)¹²

冒頭から虚無感が漂う上記の詩においてソローは、日の出や夕陽を眺めながら、自身の生き方を模索する。外界には限りない豊かさを認識する一方、心の内では貧しさを感じ、鳥の囀る夏が終わろうとするこの時において、自分には未だ春さえ訪れていないという表現には、詩人として置き去りにされたような孤独感さえも漂っている。より穏やかな状況が訪れることを求めて秋を待ち望むべきかどうかと思案するソローは、韻文作家として言葉で表現することの理想と、現実の人生を生きることのでられる充足感とを比較考量して迷った末に、書くことよりも生きること比重を置く考え方に到達していると解釈できる。

ウォールデン湖畔滞在以後のソローの日記は、滞在前と比較すると徐々に詩作が少なくなっており、『森の生活』以後の主要著作群においてもソローの詩はほとんど見当たらない。ソローは1850年晩夏以降、基本的に詩作をやめ、1850年から1861年までの日記に記されている詩は僅かである(Witherell 58)。シュナイダーが、「ソローは詩人としての自身の限界を感じ、より安定した持続的な形態として散文への純粋で理論的な嗜好を発展させた」(HDT 43)と論じているように、ソローに適した文学形式は詩ではなく散文形式であったと言える。しかしここで重要なことは、ソローは韻文作家としての詩人たることを全否定したのではなく、むしろその範疇に留まらず、生活者としての詩人を志したのであり、その生活者としての詩人の生活を、後の主要な著作群において散文形式で表現しようとしたということである。それは例えばソローがウォールデン湖畔の自然において送った独居生活、黒人奴隷解放論者としての活動、インディアンへの造詣を深めたことなど、人間の内面に宿る“genius”を信頼した実践的な生き方を志向し、その有様を著作群において表現したということである。ジョイス・M・ホーランド(Joyce M. Holland)は、ソローは「エマソンから影響を受けた詩人」であり、「ソローのような詩人は経験からのみ詩を書くことができ、著作の中で経験を再現することができる」と論じている(49)。確かにソローの詩人観はエマソンの詩人観から影響を受け、経験主義的な側面があるが、ソローの場合は書く行為のみでなく、生きるという次元において成就する詩人像を掲げていたことに注目しなければならないだろう。

その詩人像とは、これまで論じてきたように、『一週間』において度々ソローが示唆する“genius”に基づきながら「宇宙の法則」、つまり「高次の法則」との調和を図る人間としての生き様に他ならない。ソローは「生活者」たることを韻文作家たることよりも重要視する立場に立ち、以後も依然として“poem,” “poet,” あるいは“poetic”という言葉を使い続けるが、こうした概念は韻文作家と関連する概念としてではなく、“genius”を発揮する要件として使用していることに留意する必要がある。

上岡克己が『森の生活』を「ソローの書きたい詩」であったとし、彼の人生は「生きることと書くことの両方ができた」、生の証しそのものであると言っても過言ではあるまい。」(9)と述べるように、ソローは自身の生活を生きることに於いて詩的作品を生み出そうとしたのであり、その様相は、ソローの生涯をとおして、また『森の生活』以後の主要な著作群において鮮明に見出されるようになる。

5. おわりに

『一週間』には、ソローの超絶主義思想の展開過程が見出される。「日曜日」においては自身の内面において真の信仰を見出そうとするソローの自己信頼の考え方が顕著に表れている。「月曜日」においては超絶主義思想家としてソローが重視する「より高次の法則」への認識が看取され、続く「火曜日」、「水曜日」、「木曜日」においては人間の内なる“genius”に頻繁に言及し、「より高次の法則」と調和して生きる人間観が示されている。最終章「金曜日」においては詩人論が繰り広げられ、ソロー独自の考え方として、韻文による表現者としての詩人と、韻文によらない生活者としての詩人像が提示されている。ソローは超絶主義思想家として、“genius”に基づき、「より高次の法則」に即して人生を生きる詩人像の探求に最終的な着地点を見出していると考えられる。超絶主義的な最初の試みでありながらも一般的な評価においては不成功であった『一週間』は、ソロー自身の思想的かつ精神的な修養の足跡を示すものであり、『森の生活』を始めとする主要著作群に通じるソローの超絶主義思想家としての方向性が見て取れるという意味で意義深い著作であると言えよう。

注

1. 『一週間』はソローが費用を全額負担するという条件でマンロー社 (James Munroe & Co.) から出版されたが売れず不成功で、ソローは1849年の秋までに相当な借金を背負うこととなった (Harding, *Days* 246, 253-54)。ソローの最初の伝記作家であるウィリアム・エラリー・チャニング (William Ellery Channing [the Younger]) によると、ソローは屋外の事柄に関する「生き生きとした本」(“living books”) (39) を書きたいと願っていた。ソロー自身は本作について、1851年6月29日の日記で「天空に向かって開かれた、あるいは屋根を持たない本」(“a hypaethral or unroofed book”) (*Journal* 3, 279) と信じていると記している。
2. 例えば、ローレンス・ビュエル (Lawrence Buell) は、『一週間』においてソローが示す真の友情とは打算や偏見のない魂と魂との交流であると定義付ける。そしてソローにとって人間の理想的な交友関係は、自然との関係のようにならざるを得ないものと論じている (227-29)。
3. 超絶主義思想は、1830年代にニューイングランドでラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) を主な提唱者として発展した。キリスト教の宗派であるユニテリアン派の信仰とドイツ観念論を融合させた新しい哲学で、自然と人間の神聖さを賛美した。ハーディングによると、ソローがウォールデン湖畔滞在中の最初の一年で初稿を完成させたところ、エマソンはソローに直ちに出版社へ提出するよう促したが、ソローはより時間をかけて推敲すると主張し、ブロンソン・オールコット (Bronson Alcott) やエマソンからの批評を得た後、本作は1849年に出版される運びとなった (*Days* 188)。
4. Hayashi, Nanoka. “‘The Builder of a Temple, Called His Body’: In Relation to Thoreau’s interpretation of the Concept of ‘Higher Laws.’” p. 55. 林南乃加「H. D. ソローの著作群における文明批判の諸相：超絶主義思想との関連において」34頁参照。
5. Hayashi, Nanoka. *Ibid.*, p. 55. 林南乃加, 前掲同論文, 34-35頁参照。
6. 本稿における *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* の邦訳の引用文については、『コンコード川とメリマック川の一週間』(山口晃訳, 而立書房, 2010年) を参照の上、拙訳を施した。
7. ソローが人間の「内なる精神」や「より高次の性質」を重視していたことは、『森の生活』の中心的な章「より高次の法則」(“Higher Laws”) において示されている。ソローの思想の根幹には、物質や肉体よりも精神を優位とする考え方がありと考えられる。この点については、前掲の二つの拙論において詳細に論じている。
8. Hayashi, Nanoka. *Ibid.*, pp. 55-56. 林南乃加, 前掲同論文, 35-37頁参照。

9. ソローは『森の生活』の「より高次の法則」の章において、“higher laws”の意味の定義付けを明確にしていないため、本稿では、エマソンが『自然論』において、様々な神の概念や意図を示す表現として“higher laws”という言葉を使用し、超絶主義思想的な世界観を説明している箇所を参照した。超絶主義思想における“higher laws”の概念とそれについてのソローの解釈については、前掲の二つの拙論において詳細に論じている。
10. Hayashi, Nanoka. *Ibid.*, p. 53. 林南乃加, 前掲同論文, 25頁参照。
11. エリザベス・ウィザレル (Elizabeth Witherell) は、ソローの詩作の経緯や背景、特徴に関して綿密な分析を行っている。ウィザレルによると、ソローは1837年から1844年まで詩に対する最も一貫した関心を持ち続け、当時の超絶主義思想家の機関誌『ダイアル』(*The Dial*)において彼がそうしたように「詩人」と公的に名乗る意志もあったようである。ソローの詩は、『一週間』のほか日記や超絶主義思想家の『ダイアル』誌に発表されたが、1844年の『ダイアル』終刊後は『一週間』にのみ組み入れられている。『一週間』には1845年以前にソローが書いた60篇以上もの詩から部分的、あるいは完全な形で引用され、『ダイアル』からは12篇の詩が『一週間』において掲載されている(58)。
12. この詩は三つの連から成るが、元々の詩は1840年3月8日の日記に見出される。日記では“The Poet’s Delay”という題は付されておらず、五つの連から成る。冒頭で22年間の人生を振り返りながら「人間らしい言葉”(“a manly tongue”)を言えないと嘆く連に始まり、第四連では雀たちが巣を作り、夜明けに歌う陽気な姿が語られている(*Journal* 1, 116-17)。『一週間』においてはそれらの内容の連は省略され、第一連と第二連が日記では逆の配置であるなどの相違が見られる。ソローは元々の詩を内容的に凝縮し、詩人としての孤独感や憂鬱などを強く打ち出していると考えられる。

参考文献

- Buell, Lawrence. *Literary Transcendentalism*. Cornell UP, 1973.
- Channing, William Ellery [the Younger]. *Thoreau: The Poet-Naturalist*. Biblio and Tannen, 1966.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Edited by Joel Myerson, 2nd ed., AMS Press, 1979. 12 vols.
- Foerster, Norman. *Nature in American Literature: Studies in the Modern View of Nature*. Russell and Russell, 1958.
- Grodzins, Dean. “Unitarianism.” *The Oxford Handbook of Transcendentalism*, edited by Joel Myerson, Sandra Harbert Petruionis, and Laura Dassow Walls. Oxford UP, 2010, pp. 50-69.

- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau: A Biography*. Dover Publications, 1982.
- , and Michael Myer. *The New Thoreau Handbook*. New York UP, 1980.
- Hayashi, Nanoka. “‘The Builder of a Temple, Called His Body’: In Relation to Thoreau’s interpretation of the Concept of ‘Higher Laws.’” *New Perspective*, vol. 205 (新英米文学会, 2017) pp. 50-61.
- Holland, Joyce M. “Pattern and Meaning in Thoreau’s *A Week*.” *Emerson Society Quarterly*, vol. 50, 1966. pp. 48-55.
- Johnson, Linck C. “A Week on the Concord and Merrimack Rivers.” *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*, edited by Joel Myerson, Cambridge UP, 1995. pp. 40-56.
- Paul, Sherman. *The Shores of America: Thoreau’s Inward Exploration*. U of Illinois P, 1972.
- Richardson, Robert D., Jr. *Henry Thoreau: A Life of the Mind*. U of California P, 1986.
- Schneider, Richard J. *Civilizing Thoreau: Human Ecology and the Emerging Social Sciences in the Major Works*. Camden House, 2016.
- . *Henry David Thoreau*. Twayne Publishers, 1987.
- Thoreau, Henry David. *Journal*. Edited by John C. Broderick, et al., Princeton UP, 1981-. 8 vols. to date.
- . *Walden*. Edited by J. Lyndon Shanley, Princeton UP, 2004.
- . *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Edited by Carl F. Hovde et al., Princeton UP, 2004.
- Wells, Henry W. “An Evaluation of Thoreau’s Poetry.” *Thoreau: A Collection of Critical Essays*, edited by Sherman Paul, Prentice-Hall, 1962. pp. 131-141.
- Witherell, Elizabeth. “Thoreau as poet.” *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*, edited by Joel Myerson, Cambridge UP, 1995. pp. 57-70.
- 伊藤詔子『よみがえるソロー——ネイチャーライティングとアメリカ社会』（柏書房, 1998）
- 上岡克己編著『世界を変えた森の思想家——心にひびくソローの名言と生き方』（研究社, 2016）
- 林南乃加「H. D. ソローの著作群における文明批判の諸相：超絶主義思想との関連において」博士論文（九州大学大学院比較社会文化学府）2018.
- ヘンリー・ソロー『コンコード川とメリマック川の一週間』山口晃訳（而立書房, 2010）

（成城大学）

hs-nanoka@seiyo.ac.jp